

おおさか
KEY
わーど
第31回

年の瀬前に**新年**おめでとらうございませす

十二月・一月合併号をこんな形にまとめてみました…



近松門左衛門墓碑前
(大阪市中央区谷町8丁目)
7丁目の交差点を南下すぐ
谷町筋の東側



井原西鶴終焉之地碑
(大阪市中央区谷町3丁目)
3丁目の交差点を南下、
谷町筋の東側



芭蕉句碑
(南御堂境内)

※上の写真、「芭蕉句碑」とは別です。

月日は百代の过客にして、この一年も過ぎ去ろうとしている。本誌12月・1月合併号の原稿を書いているわけだが、元禄時代を代表する文豪、井原西鶴(1642—1693)、松尾芭蕉(1644—1694)、近松門左衛門(1653—1725)で年末年始をまとめてみよう。三人とも大阪と関係が深い。西鶴も近松も大坂が活動の本拠だが、芭蕉も南御堂前の花屋仁右衛門邸で没し、御堂筋の緑地帯に、終焉の地の碑*がある。

まずは12月号だ。年末といえは「節季払い」、江戸時代の商家では、盆と暮れにまとめて集金する習慣があった。それを鋭く浮世草子にしたのが西鶴の『世間胸算用』(元禄5年 1692出版)である。大晦日にくりひろげられる貸し手と借り手の駆け引き、手練手管を五卷二十編に描く。副題もなんと「大晦日は一日千金」。年の瀬にしたたかに生きる庶民の姿を活写する。第一話のタイトルからして「流行小袖は千種百品染、大晦日の振手形如件」で、西鶴らしいユーモアと哀感が漂っている。

一方、人形浄瑠璃の大劇作家・近松も12月のドラマを書いている。宝永4(1707)年に道頓堀で初演され、いまでも文楽や歌舞伎で上演される、有名な「心中重井筒」である。舞台は12月15日、大坂上町にある紺屋(染め物屋)である。

幕が開くと、正月前なのに店にいるよりも外を歩く主人・徳兵衛を、丁稚が替え歌で、「正月の前の際々に旦那殿 外が内、お神酒過してうかうかと…」と小馬鹿にし、商売はお内儀のお辰に任せっぱなしで、注文を受けた誂え物やら、年末の支払をどうしますことやらと心配する。徳兵衛は入り婚だが、遊女お房

と馴染みを重ね、妻のお辰に無断で借金をする。それが発覚して今後一切、縁を切ると約束しながらも、結局、哀れ二人は心中するのである。年の瀬に起こった悲劇が、近松らしい美しくも強い文章で書きあげられている。



と、話が深刻になったところで、ここからは1月号の分として、芭蕉の正月の句をとりあげる。貞享5(1688)年、故郷・伊賀上野で新年を迎えた芭蕉は、行く年の名残を惜しんで大晦日から酒を呑んでいると、久しぶりの帰郷でリラックスし、寝正月になってしまった。俳聖芭蕉もまた人の子だったんですね。そこで次の句、

「宵のとし、空の名残おしまむと、

酒のみ夜ふかして、元日寝わすれたれば、

二日にもぬかりはせじな花の春」

元禄4(1691)年の正月には次の句も、

「三日口を閉て、題正月四日

大津絵の筆のはじめは何佛」

東海道を往来する旅人の土産であった大津絵には、色々な仏さまが描かれたが、年始の初仕事に職人が、どの仏を選んで描くのだろうといった意味。元日から三日間、口を閉ざして句を作らず、四日に作ったという設定も、この句自体、三ヶ日が明けての新年の初仕事の句であることを示している。

ということで改めまして新年おめでとらうございませす。私もそろそろ仕事をしないと、またまた来月の原稿締めきりに追われることに…。